
平凡からの脱却

琴麗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡からの脱却

【Nコード】

N9537P

【作者名】

琴麗

【あらすじ】

平凡な日々。平和でいいがやはり物足りない。——刺激が欲しい。いや、あの、エロな刺激は足りてるんですが。エロ本で。期待に満ちた高校生活。平凡から逃れるため、今日も主人公はイベント発生を待つ。

平凡な日々からの脱却はまだか。いつになったら充実した日々になるのだ。

桜が舞い散るこの季節。うん、入学式だ。

今年は例年より暖かいのか、桜が咲くのはまあまあ早めだった。中学生生活は特筆することもないほど、平凡な日々だった。

特に勉強が出来るわけでもなく、特に習い事をすることも無く。なんてことのない毎日。

そんな毎日が俺は好きだったが、……やはり刺激が足りないわけで刺激といってもエロ本から得られる刺激ではない。その刺激は足りている……一応。

というわけで、そのまま平凡な流れで志望校に合格し、平凡なまま入学式、つまり今日になったわけだ。

「みなさん、入学おめでとうございます。これでみなさんは高校生となるわけですが……」

恒例の体育館での校長先生の話である。幸いなことにこの高校の入学式は座るシステムなようだ。……しかし長い。

隣に座っている女子はガクガク頭が揺れている。……完全に寝てる。よく見れば周りの人ほとんどが寝てた。

俺も寝るか、とは思ったがここで寝ると何か重大なイベントを逃してしまいそうで、やめた。

特に何も起きることも無く、体育館内の生徒の8割ほどが寝たところであるだけの長い式は終わった。

指定された教室、座席に座る。窓際ではなかったが、幸いにも後ろのほうの席だったのでよしとする。

ああ、これから1年宜しく頼むよ我が相棒。机にしみじみと思いを馳せる。

充実した日々を送るために周りの席は女子で埋まって欲しい。それがただ1つの願望であった。

しかし一向に担任の教師は教室に入ってこない。ザワザワとする教室。

さっさと友達を作っておきたいのか、近くの席に適当に声をかけている。……俺もかけてみるか。

勇気を振り絞り、辺りをギラギラと見回してみる。

お、隣席どちらとも女子。これは勝つる！……前の席は残念ながら男子だ。いかにもゲームとかアニメが好きそうだ。

後ろは……恐くて振り向けるわけが無い。声もしないし、恐らく寝ているのではないだろうか。

とりあえず右隣の子に声をかけるとしますか。黒髪ロング、大人しそう。緊張しているのか伏せ目がちで、特に話しかけられても無いようだ。

……ってよく考えたら俺、女の子に話しかけたことねえんじゃないか。かつこつけてはみたものの、全然女の子と話した記憶もなし。

……まあ妹が居るけど。

ぐるぐると悩んでいると、突然左隣の子が話しかけてきた。

「ちよっと、女に声かけるならさっさと声かけなさいよ！見ててイライラすんのよ」

何これ怖い。

「あのね、高校生活を楽しく過ごそうってのは分かるわ。でもね、そんなイジイジしてちゃダメよ。とりあえずあたしが友達になってあげるから、よろしくね」

につこりと微笑む左隣。なんなんだこの笑顔は。怖い人だと思ったけど優しいのか？

「ありがとう。……俺は佐藤 太郎」

「ああそうね、まずは名前よね。あたしは紅炉 鈴」

意外と紅炉とかいうこの女はいいやつなのかもしれない。まあなんだかんだで仲良くなれそうなので嬉しい。ていうかすっげー嬉しい。ただ俺好みではなく、なんとなくチャラそうな感じではあった。茶髪で、ショートヘアーなんだろうか。

「さあホラ。声かけなさいよ。もう勇気出たでしょ？ホラ」

……急かしてくる。なんか余計に声をかけづらいじゃないか、右隣の子が凄く怯えている。

「あ……あのー……まあ聞こえてたとは思いつけど……俺は佐藤太郎」
黒髪ロングヘアー、ちらちらとこちらの様子を伺っている。……喋れないのか？

「もーあんたもうね、怯えちゃってるじゃないの、ごめんなさいね、あたしと仲良くなりましょ？」

紅炉がキラキラとした目で黒髪ロングヘアーに話しかけている。なんだかんだでお前も仲良くなりたかったんだな。

と、かぼそい声でやっと思髪ロングヘアーが喋った。

「霜月 早苗しもつき さなえって言います」

「へえーさなえちゃん、宜しくね！」

すっげー笑顔。紅炉つてもしかしてそっちの気があるのだろうか。嬉しそうにずっと霜月さんを見つめてる。

「よろしく……霜月さん」

霜月さんは俯いてはいたが、笑ってくれたような気がした。

その後は特に意味の無い会話を交え、親睦を深めた。

まあ会話といっても一方的に紅炉が喋り、俺が突っ込み、霜月さんが頷く、というようなものだ。

無事担任らしき教師もかなり遅れて来て、まだ入学式だというのに妙に盛り上がっている教室を不気味そうに眺めていた。

担任は遅れてきた方がなんだかんだ親睦を深めやすいのかもしれない。

ま、なんとか友達も出来て良かったと思うわけではある。しかしこのままでは平凡過ぎる訳だ。

並みではだめだ。やはり主人公的なキラキラ感が欲しいわけで。

このぐだぐだ感から逃れることは出来るのだろうか。俺はそんなどうでもいいことを考えながら、担任の話を聞き流していた。

桜はもう散った。気付けば高校生活も一ヶ月を経とうとしている。初めての電車通学。1時間の人に比べれば15分程度でつくので楽ではある。

新しい教室は中学の頃と比べると全く埃っぽくなく、快適だった。そんな日々はすぐに過ぎ去っていく。

クラスメイトとは一通り顔馴染みになることができた。だが、行動を共にするのは両隣の霜月さんと紅炉。なんだかんだで楽しく過ごせてはいる。

ある休み時間。俺に声をかけてきた人が居た。

「あの、佐藤くん。ちよつと、いい？」

学級委員の山下さんだ。茶に近い黒髪で、ロング。男子の中では巨乳で美人と噂されている。

まあ確かに巨乳はいい。ただし乳は乳だ。やはり巨乳だから貧乳だからというよりも――

「佐藤くん？もしもーし」

「あ、ごめん。どうしたんすか？」

山下さんとのファーストコンタクトだというのに、印象を悪くさせて何をやってるんだ俺は。

「ちよつと相談事があつて。……昼休み、空いてるかな？」

小声で山下さんは俺にそう言った。ああ、言ったさ、この耳が聞いたんだ、間違いないね。

すかさず俺はもちのろんさ！とハイテンションで答え、妙に顔を引きつりつつも、場所は屋上と告げ、山下さんは席に戻っていった。

……相談事？俺に、相談事？”思い当たること”で脳内検索をかけてみたが検索結果は0だった。

授業は一応真面目に聞きつつ、気がつけばチャイムが鳴り、休み時間、チャイムが鳴り、を繰り返し、あつという間に昼休みになった。「紅炉、悪いけどちょっと今日昼ごはんパス」
「あんだ、彼女でも出来たの？ まあ早苗ちゃんが居ればそれでいいからあんたはさっさとどっかいきなさいよ」
少々ひどい扱いに残してあったプリンが食べられていたときの悲愴感を味わいつつ、詮索されなくてよかったと安堵する。

過ごしてきた一ヶ月より長いんじゃないか？なんて思ってしまっほど屋上までの道のりが長く感じる。

相談事相談事相談事。俺に、相談事。

——平凡じゃないことが起きようとしている。

妙な期待と不安を抱えつつも、屋上の扉を、開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537p/>

平凡からの脱却

2011年1月9日02時03分発行